



# マッカーサーが愛した「ス・パイ」中

## 笠井重治と日本の戦後

(敬称略)

清泉亮



一九四五年八月十五日——。終戦という「平和」の訪れは、日本国民に「困窮」の始まりを告げた。占領軍による物資配給は、当然のことながら十分とはいえず、希少な配給物資は闇へと流れ、各地の闇市で高騰した末に、敗戦国民は戦中同様の餓えとひもじさにあえいだ。

怒りと焦燥に駆られた餓えた群衆は、皇居へと向かった。四六年五月、「食糧メーデー」。二十五万人の群衆が皇居前広場に押し寄せた。

上から眺めれば、まるでイワシの大群のように右に左に揺れる人波を、*「ス・パイ」*の司令官、ダグラス・マッカーサーが見つめていた。

「ボーナス・マーチ」の光景が重なって見えていたかもしれない。そのとき、マッカーサーは催涙弾でデモを蹴散らした。だが人心が荒廃した敗戦国の民衆に対して、同様の措置で応ずれば不測の事態が起きかねないという危惧が脳裏をよぎる。日本国民にもたらされた民主主義は、同時に「抗議活動の自由」をももたらした。力で押さえ込めば、占領統治の意味を自ら否定しかねない。

「民衆の抗議を暴力で押さえ込むことは得策ではない」

傍らの笠井もそう説く。食糧メーデーの翌日、マッカーサーは声明を発表する。

「暴民デモを許さず」——。

同時に輸入小麦の放出を許可し、飢餓根絶に向けた具体策を指示した。

マッカーサーは、小麦がどこまできちんとルートに乗り、日本人の食卓まで届くのかを懸念した。餓えた国民の腹が満たされなければ、いずれまた暴動の機運は再来する。

世情の機微を把握し、対応する必要があった。

笠井はマッカーサーからの請託を受けて歩いて回っ

傍らには、小柄な日本人が寄り添っていた。一八八六（明治十九）年生まれ笠井重治。還暦を目前にした五十九歳になっていた。直前の四六年二月に行われた戦後初の総選挙で衆議院議員に当選している。マッカーサーは、アメリカ人としてもひととき大柄で、身の丈百六十センチほどの笠井と並べば、その巨軀はさらに引き立って見えた。

### マッカーサーの感激

マッカーサーの目には、かつて陸軍参謀総長時代にワシントンで見た、退役軍人による待遇改善要求デモ、

た。

吉田茂も外交官時代の在外経験が豊富で、マッカーサーと通訳なしで会話したが、英語で夢を見るほどの笠井の流暢さは吉田を上回った。

笠井は、マッカーサーに報告した。

「小麦放出は、パン屋へのルートに乗ったようだ。小麦を原料とする白いパンがようやくパン屋に並び始めている。白いパンが店頭に並ぶのは終戦後初めてのことで、人々は興奮して列をつくって買い求めている」

次の話には、マッカーサーは感激した。

「老人や病人は人前でもかまわず泣きだした。パン屋に並んだ人々はこうも言った。マッカーサーのパンだ。將軍がくれたんだ。貧乏人を救ってくれる、パンをくれる征服者だ」

マッカーサーは晩年まで、笠井のこのメモを自身の手元に大切に保管していた。

サンフランシスコ講和条約に基づき、日本が主権を回復したのは一九五二年だが、笠井はそれより二年早い五〇年に、日本人としては戦後初めて、査証を得て渡米している。アメリカ政府との距離は、並の外交官をはるかに凌ぎ、外務省を超えたアメリカとの「パイ